

教員名	研究概要
谷内 幸喜	特別研究では、日常生活活動低下に対する問題解決能力を向上させることを目的に、理論と実践の両面からリハビリテーション学を研究する。具体的には、実際の場面(職場等)での出張指導をとおして科学的分析を含めた研究を実践し、日常生活活動能力向上のための手段としてのリハビリテーション学の研究指導を行う。
森藤 武	骨格筋の萎縮や機能不全、関節機能障害などの運動機能の低下は、若年のスポーツ選手から虚弱高齢者まで、傷害・障害を招くリスクがあり、これらを改善することは重要である。そのため、スポーツ選手から高齢者まで傷害・障害に関わる因子を探究し、運動機能障害を予防・改善するための研究指導を行う。
烏野 大	物理的エネルギーを利用することで、生体の神経生理学的反応や化学的反応を引き起こすことができる。生体内で起こるこれらの物理的変化を治療に応用したものが物理療法である。本研究室では、物理的エネルギーが運動機能や神経機能に与える効果を明らかにすることを研究テーマとする。
竹内 弥彦	特別研究では、高齢者や障害を有する方の転倒のメカニズムやその予防方略について姿勢調節能の観点から研究を行う。さらに転倒予防に有効な運動介入の開発から、介護予防につながる住民主体の地域づくりの方策立案まで、多角的に地域リハビリテーションに関連した研究を行う。
四十竹 美千代	臨床における看護技術、看護ケアの検証を生理学的視点、社会的視点など幅広い視点から検証することにより、看護の質向上につながる。本研究室では、主に手浴の効果検証、成人期の患者における効果的なケア検証について指導を行う。
宮澤 純子	妊娠・出産・子育てを支援することは、単に子どもと家族をサポートすることにとどまらず、人の一生のWellbeing(健康&幸福)の基盤をつくることにつながる。本研究室では、予防的視点からプレコンセプションケア、在日外国人妊産婦支援、周産期メンタルヘルス、包括的母乳育児支援、子ども虐待予防等について研究指導を行う。
鈴木 明子	地域の施設を対象とした意見交換会を行いつつ、行政やHIV拠点病院と共に、高齢化しつつあるHIV陽性者が、地域で長期に渡って療養できるような体制を構築するための仕組みづくりについての検討している。
後藤 武	免疫学的な作用により抗炎症効果を期待する物質に関して、投与経路や体内動態を考慮した製剤学的な工夫により、薬物治療の有効性・安全性・信頼性を高め、担保する基礎研究について指導する。
大森 直哉	有害作用や相互作用などの特性から使用方法の限られる物質に関して、投与経路や体内動態を考慮した製剤学的な工夫により、薬物治療の有効性・安全性・信頼性を高め、担保する基礎研究について指導を行う。
大橋 優紀子	親と子の関係性は、乳幼児、小児期、ひいては生涯にわたる発達の重要な土台であることから、親子の関係性に関わる研究テーマを幅広く取り扱う。一例は、親子の相互作用や愛着の障害、その影響要因の解明、親子のメンタルヘルスとそのケア、ペアレンティング介入、虐待予防など。心理アセスメント法の開発や、専門職に対する心理援助教育の効果等の研究指導も行っている。
二宮 彩子	超高齢社会において健康科学は、人の出生から死亡までのライフサイクルに応じ、連続性を考慮したうえで、且つ、ライフステージの特性をふまえて焦点化した研究が必要である。 本研究室では、主に、高齢者を対象とした看護や介護の質、多職種連携、そして、看取り等について、追究した研究の指導を行う。
清水 清美	リプロダクティブヘルス/ライツの視点をもった健康支援、発達支援、家族支援方法、癒しのケアについて理解を深め健康支援ができる人材を育成することを目的とする。具体的には、思春期教室や両親学級の在り方、不妊・生殖医療を受ける女性やカップルの支援、精油を用いたトリートメントのケア効果等の研究を支援する。
森下 勝行	ヒト（若年者・高齢者・患者・スポーツ選手）の運動機能を工学的手法により明らかにすることと、運動機能障害を予防・改善する物理療法と運動療法の新たなハイブリッド治療を開発するための研究指導を行う。

教員名	研究概要
中尾 英俊	スポーツ選手に起こりやすい傷害に対し、多角的な評価を行うことで関連する要因を検討し、新たな予防方法やアプローチ方法を提案できるよう研究指導を行う。
北田 素子	看護基礎技術の効果や方法を、エコー、サーモグラフィ、圧測定器などの機器を用いて可視化し、評価検証する実験研究や実態調査研究の指導を行う。
西口 慶一	進化医学とは、進化生物学の視点から医学や健康問題を理解し対処しようとする学問分野である。この進化医学の視点から考える心疾患・感染症・呼吸器疾患・酵素（アイソザイム変異）の新しい治療薬の開発の実験指導を行う。
太田 篤胤	超高齢社会となった我国においては、QOLを維持するため多くの国民がいわゆる健康食品を利用している。その中で大きな市場を形成している機能性表示食品については、全ての食品について届出情報がデータベース化され、公開されている。研究は、これら公開情報の詳細を精査し、機能性表示食品の適正な利用法を見出そうとするものである。
酒井 健介	食品成分摂取による運動時の生理的応答に関する研究指導および対象者の環境を考慮した食行動の影響および定着に関する研究指導を行う。
濱田 昌実	超高齢化社会に突入した日本において、自助による生活習慣病の予防・重症化予防とともに、地域のネットワークを構築し、互いに支えあい健康になるための仕組みづくりが喫緊の課題である。本研究室では「生活習慣病予防・重症化予防」「人のつながりと健康」をテーマに、包括的な生活習慣病予防にむけた保健指導方法の開発及び住民主体の健康な地域づくりに向けた活動展開のプロセス及び活動継続による効果について可視化するための研究指導を行う。